



TITLE:

[書評] Barry Dainton, 『Stream of Consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience』 Routledge, 2006 (revised paperback edition).

AUTHOR(S):

太田, 紘史; 佐金, 武

---

CITATION:

太田, 紘史 ...[et al]. [書評] Barry Dainton, 『Stream of Consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience』 Routledge, 2006 (revised paperback edition).. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2010, 12: 106-118

ISSUE DATE:

2010-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/97993>

RIGHT:

## 書評

Barry Dainton,  
*Stream of Consciousness:  
Unity and Continuity in Conscious Experience.*  
Routledge, 2006 (revised paperback edition).

太田紘史\* 佐金武\*

### 1. 意識の流れにアプローチする

ウィリアム・ジェイムズの有名な心理学用語をタイトルとする本書は、2000年に刊行された同名の書物の改訂版である。(オリジナルとの主な相違は、末尾に「ポスト・スクリプト」が追加されたことだ。) 著者バリー・デイントンは、そのタイトルに偽りなく、ジェイムズ的な観点に立脚しつつ、意識をめぐる哲学的な諸問題をオリジナルかつ体系的な仕方で論じている。周知のように、心の哲学においては長らく、心身(脳)問題が人々の関心の中心であり続けている。だが、本書の問題意識はそのような主流とは一線を画し、意識そのものの一般的特性、とりわけ気づきと内観、現象的空間、時間の意識などが考察の対象である。これらのトピックを通じて繰り返し強調されるのは、伝統的な「気づきと内容の二元的区分」からの脱却、そしてそのアンチテーゼとしてのジェイムズ流のアプローチの可能性である。ただし、デイントンは、ジェイムズの哲学をそのまま移入するのではなく、「共-意識」という概念を足がかりに独自の仕方で意識をめぐる諸問題に立ち向かう。以下、各章の内容を簡単に整理しよう(2節、3節、4節)。そのあとに我々は、デイントンの時間意識のモデル構築が不全であることを示すとともに、そのモデルを徹底的に崩壊へと導くつもりだ(5節、6節)。

### 2. 共-意識と共時的統一

第1章の導入において、デイントンは、意識経験の位置づけに関する本書の立場を明示する。本書の扱う意識経験には、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の他、身体感覚や(意味)理解の経験なども含まれるが、デイントンはまず、これらの意識経験が実在する世界の部分をなすという主張、すなわち「経験についての実在論」を表明する。経験についての実

在論とは、意識経験を科学と同じ程度に真剣に受け止めるということに他ならず、意識経験についての消去主義を否定するということを意味する。この实在論にとってはしかし、二元論的な立場と非二元論的な立場のどちらも可能な選択肢である。このうち、デイントンは少なくとも、デカルト型の二元論に対しては反対の立場に立つ。他方、非二元論的な立場については、経験は物理的世界のうちに編み込まれているが、物心両者の関係が正確にどうなっているかについては中立を保つ、「穏健な自然主義」が暫定的にはもっともらしいとし、その限りでの現象学の可能性を擁護する。本書でデイントンが展開する現象学とは、意識経験の本性についての哲学的考察を加えながら、その特徴を記述するタイプの探求であり、われわれの経験が、探求以前には明示的に知られていなかった側面をもつという可能性を排除しない。このような立場は、ある種の唯物論とも両立可能である。ある科学理論が現象学的事実と一致しない場合、それは現象学を改訂する契機となるかもしれない。しかしながら、「経験についての实在論」を前提する限り、この不一致は現行の科学が不完全であることを示唆しているかもしれず、科学理論もまた同様に改訂の可能性を秘めていると考えることができる。本書の主たる目的は、意識の統一と連続性についての現象学的探求である。統一された意識の流れの物理的に十分な条件を知るだけでは、純粋な経験のレベルでこのような現象に何が必要とされるのかが分からないため、われわれは現象学的探求を行わねばならない、そうデイントンは論じている。

第2章の中心的問題は、意識の統一はいかにして可能かということだ。意識の統一を生み出したり、それを支えたりするものは、内観や注意、気づきの作用であるという見解をデイントンは丁寧に批判し、これらの見解の牙城として、次のような考えに敢然と戦いを挑む。その考えによると、意識は気づきと内容の二面からなる構造をもち、意識の統一は、様々な内容が一つの気づきのもとにあることによって成り立つ。だが、この考えを徹底すれば、何の内容ももたない純粋な気づきが可能ということになる。デイントンは、そのような純粋な気づきを指定したくなる様々な動機を批判的に検討しつつ、そのどれも決定的ではないと診断する。気づきと内容の二分法による説明に代えて、デイントンが提示する代案は、現象的な内容は存在すればそれだけで意識的であるという、意識についての「シンプルな見解」である。この見解によれば、諸経験は互いに共意識という原初的な関係によって結びついているのであり、このことから直ちに（純粋な気づきなるものを介することなく）意識の統一がもたらされる。

第3章でデイントンは、意識経験の統一の基礎となるのは何らかの空間的特性である（もしくは、共意識は空間的特性に基礎をもつ）という主張（「S テーゼ」）を批判する。まず、

物理的な空間的特性が共意識を可能にすることはない。仮に我々の様々な感覚器官を分離し、それらを別々の場所においたところで、これらの感覚的意識自体は共意識的であり続けるだろう。では、現象的な空間的特性が共意識を可能にするのだろうか。意識経験は実体的な空間的特性を持つという考えは、一部の感覚経験について考えると、一見もっともらしく思われる。例えば、視覚経験は、視野という充滿した現象的空間が、あらゆる部位のそれぞれにおいて特定の質を例化したものにも思われる。だが、感覚経験にはしばしば虚空とでも言うべき現象的空間がある。例えば視野の奥行きは何かで充滿しているようには思われず、また聴覚経験について言えば、あらゆる方位のあらゆる距離に特定の音の質が例化されているようには思われない。そこに何かしら空間的なものがあるとしても、それは現象的対象の間の関係から理解されるようなものでしかない。さらには意識的思考のような、空間的特性のない意識経験を考慮すると、S テーゼが維持できないことは明らかだ。デイントンは結果として、共意識が他に還元されない原初的關係であると結論する。

第4章では、共時的な経験に焦点を絞り、「共意識」という関係の本性が考察される。デイントンの主張するところでは、共意識は、同時的な経験の間に成り立つとき、反射性、対称性、そして推移性を満たす。つまり、共意識は、同時的な経験の間の同値関係である。ここで慎重に検討する必要があるのは、同時的な経験について、共意識が本当に推移性を満たすかどうかということについてだ。すなわち、同時的な経験  $e_1$ 、 $e_2$ 、 $e_3$  について、 $e_1$  と  $e_2$  が共意識的であり、 $e_2$  と  $e_3$  が共意識的であるとき、 $e_1$  と  $e_3$  も共意識的であるといえるのかどうかの問題である。分離脳の事例は一見すると、同値関係としての共意識に対する反例になっているように思われる。分離脳の手術を受けた患者をある実験にかける。その実験の示唆するところでは、分離脳の手術を受けていない被験者の場合と同様、ある経験  $e_1$  と別の経験  $e_3$  の両方に対して共意識の関係にあるまた別の経験  $e_2$  が存在することは確からしいように思われる。だがしかし、分離脳の手術を受けた被験者自身にとってはもはや、 $e_1$  と  $e_3$  が共意識的だとは認知されない。それでもなお、共意識がある種の同値関係だと主張し続けるならば、手術以前には一つの意識だったものが、手術を受けたどこかの時点で突然、複数の意識に分かれたということになる。他方、共意識が一般に推移性を満たさず、経験の部分的な統一しかもたらさないのだとすれば、意識の統一はもともと程度問題に過ぎず、上のような不合理も生じない。それゆえ、共意識は同値関係ではないと考えるべきではないか。これに対し、デイントンは、分離脳の手術を受けた被験者が本当に、 $e_1$ 、 $e_2$ 、 $e_3$  を同時に経験できているかどうかを疑う。もしこれらが同時に経験されていないのだとすれば、これは同値関係としての共意識に対する反例とはならない。これらが分離脳手術を受けた患者に同時に経験されているのかどうかについては様々な推測の余地が

あり、デイントンは実際に、そのような一考に値する推測をいくつか提示してみせる。

### 3. 共-意識と通時的統一

第5章では、いよいよ時間意識に話題が移る。デイントンによれば共-意識は、経験の共時的統一だけではなく、通時的統一をも担っている。様々な同時的な感覚や思考が共-意識によってともに経験されるのとまったく同様に、異なる時点に生じる継起的な意識経験は共-意識によってともに経験される。彼の論点は、次の二つに集約される。第一に、時間意識は実在するということ、第二に、その基礎になるのは共-意識であるということだ。この章では、これらの考えと対立する二つの考えが批判される。まず彼は、共-意識ではなく記憶に基づいて時間意識を説明しようとする（あるいは説明し去ろうとする）理論を批判する。記憶説によれば、無持続的な経験が例化されるのに加えて、その直前に例化された（やはり無持続的な）経験を我々が覚えているために、持続的な経験が可能になる（もしくは持続的な経験があるかのように思われる）。だが、この理論を保持し修正していくと、結局は、ある時点に莫大な数の入れ子状の無持続的な経験が記憶されているという説へと崩壊し、現象学的なもっともらしさを失う。続いて彼は、共-意識ではなく継起的経験の間の質的類似性によって時間意識を説明しようとする理論を批判する。この理論に従えば、現象的な複製個体をまたがる意識の流れが可能になってしまう。しかし、ジェイムズもすでに認識していたように、異なる人格で隔てられた経験は、少なくとも通常の仕方では統合されない。結局デイントンは、記憶や質的類似性で時間意識を説明することはできず、また、現象学的観点からも変化や持続の経験は所与であるとして、経験間の原初的な関係である共-意識によって時間意識を説明することを動機づけようとする。

第6章のテーマは、時間の現象学に関する二人の哲学者（ブロードとフッサール）の思想的変遷である。ブロードの前期の理論によると、われわれの時間の意識には、「気づきの行為（ないし作用）」とその「現象的内容」という二つのレベルがあり、個々の気づきの行為には、一定の時間幅をもった現象的内容（前期のブロードにとっての「見かけの現在」）が与えられる。しかしながら、瞬間的な気づきの行為は不可能であり、気づきには二つの行為にまたがる何らかの時間幅が必要とされる。そして、その二つの行為の現象的内容におけるオーバーラップこそ、この気づきを通じて把握される「中心的内容」（現象として与えられる、いわゆる「見かけの現在」）である。以上のような仕方では、われわれの気づきが幅をもった内容を把握することが説明される。この説明を基本図式として、後期のブロードはまず、瞬間的な気づきの行為を認めることで前期の理論の改訂を図る。また、気づき

の内容に付与される「現前性 (presentedness)」という程度を許す時間的特性を新たに導入し、われわれの現象に現れる「時間の移ろい」の解明を試みる。他方、前期のフッサールは、瞬間的な気づきに「過去把持」と「未来予持」というある種の時間的な表象が与えられると考え、基本的には後期のブロードとよく似た仕方で、われわれの時間の経験を説明しようと試みた。

しかし、デイントンの解説にしたがえば、ブロードとフッサールのどの説明にも困難がある。気づきとその内容の二分法を保持し続ける限り、同一の現象的内容が何度も意識に現れるという「繰り返し内容問題」が生じることになり、われわれの現象学的事実に合致しない。というのも、前期ブロードのように、現象的内容そのものが意識に与えられると考えると、その同一の内容が別個の気づきによって捉えられるとすれば、それが同じ経験を構成するとはいえなくなってしまうからだ。他方、同じ現象的内容の異なる表象という考えに訴えれば、繰り返し問題は確かに解消されるが、われわれは時間を通じて同じ現象的対象を経験していないことになってしまい、時間に関わる変化や内容の同一性の直接的な気づきを不可能にしてしまう。デイントンの考えにしたがえば、ブロードとフッサールの失敗は結局、気づきの行為とその内容の二分法を前提してしまっていること、また瞬間的な気づきに与えられる時間的な表象という考えに訴えてわれわれの時間意識を説明しようとしたこと、以上の二点のいずれかに端を発していると考えられるだろう。

第7章では、先に見たブロードとフッサールの説明を乗り越える、時間意識の解明が試みられる。デイントンのモデルによれば、現象的内容だけでなく気づき行為それ自体が持続し、なおかつ、継起する二つの経験の気づき行為は部分的にオーバーラップしている。それら二つの気づき行為のオーバーラップ部分は数的に同一であるので、それらの気づき行為がとらえる現象的内容は繰り返し再生されることがない。ブロードやフッサールのモデルは、時間的に延長した現象的内容をとらえる気づき行為自体は現在という瞬間に位置するという原理——「同時気づき原理 (PSA; Principle of Simultaneous Awareness)」——に基づいており、現象的内容が繰り返し再生されるということを含意するため、現象学的に不適切である。対してオーバーラップモデルは PSA を放棄し、気づき行為を持続的なものとすることで、現象的内容の繰り返しという帰結を回避する。この方針は結局、現象的内容と同じ時間幅の持続をもった気づきの措定——「呈示共起原理 (PPC; Principle of Presentational Concurrence)」——を帰結する。そしてデイントンは、このモデルにおいて気づきと現象的内容の二分法を、もはや不要なものとして崩壊させ、意識経験についての一元的な「シンプルな見解」へと至る。こうして、継起的な意識経験が次々とオーバーラップし、それらの間は共意識的な関係で結ばれるという、デイントン独自の時間意識のモデ

ルが提案される。

#### 4. 現象的な相互依存と経験のグローバルな特徴としての共-意識

第8章では、現象的な相互依存の関係が取り上げられる。まず、二つの考え方がある。一つは、全体としての経験が存在するためにはその部分が不可欠とする、経験についてのメレオロジカルな立場である。もう一つは、経験の部分が存在するためにはその全体が不可欠とする、全体論的立場である。この後者の考えにしたがえば、経験の諸部分のもつ様々な特徴は、全体としての経験が変わってしまえば、劇的に変化することになる。心理学や現象学においてはとりわけ、経験のこの全体論的な特徴に関心が集まる傾向にある。しかし、経験一般に関する限り、全面的な全体論は明らかに誤りである。なぜなら、異なる感覚経験については、多くの場合、全面的な全体論は成り立たないからだ。たとえば、私の背中の痛みは、私の視覚経験に依存しているようには思われない。では、一つの感覚経験の内部（視覚、聴覚、味覚など、それぞれ別種の感覚経験の内部）では全体論は成り立つだろうか。ゲシュタルト的な対象に典型的のように、ある種の経験については、全体論が正しいように思われる。しかし、実際には、一つの感覚経験の内部においてさえ、全体論は限定的にしか成り立たない。たとえば、私の右側に積み上げられた本の配置が違っていても、残りの視覚経験に影響があるとは考えられないだろう。よって、現象的な相互依存の関係については局所的で限定的な全体論しか成り立たない、デイントンはそう結論する。

第9章においてまず指摘されるのは、共-意識もまた諸経験の間に、ある種の相互依存の関係を生み出すということだ。共-意識は意識に現れるすべての経験の間に成り立つ関係であるので、それが生み出す経験間の相互依存は、局所的でもなければ限定的でもない。しかし、デイントンによれば、このことは、第8章で棄却された意味での全面的な全体論が正しいということを含意しない。そこでの結論は、現象の純粋に内在的な特徴による相互依存については、局所的で限定的な全体論しか成り立たないということだった。共-意識による相互依存は、これとは全く異なる。共-意識の注目すべき特徴は、経験のもつ通常の質的特徴に変更を加えないということである。とはいえ、共-意識はそれでも経験される関係であり、それゆえ、より正確には、経験の非質的な特徴というべきかもしれない。ここで導入される新たな区別は、経験の「ローカルな特徴」と「グローバルな特徴」である。経験のローカルな特徴とは、大雑把に言えば、音や色のような、通常の質的な性質のことである。第8章で見たように、このローカルな特徴についてはせいぜい、局所的で限定的な全体論が正しいに過ぎない。他方、経験のグローバルな特徴とは、共-意識という関係に根

拠をもつ、特定の経験についての半ば内在的で半ば外在的な関係的性質のことである。たとえば、聴覚経験  $e_1$  と視覚経験  $e_2$  が共-意識の関係にあるとき、 $e_1$  は「 $e_2$  と共-意識的である」というグローバルな性質をもち、 $e_2$  もまた、それと対称的なグローバルな性質をもつ。デイントンがいわんとするは、このグローバルな特徴については、経験間の全体論的な相互依存が成り立つということであり、これにより、共時的な意識の統一や、継起的な変化の経験が可能になるということだ。

## 5. デイントンのモデル構築——三つのステップの失敗

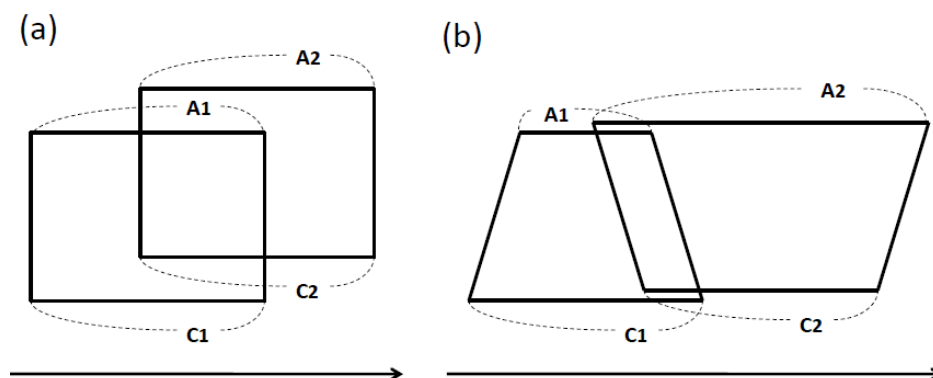
デイントンのモデルは、繰り返し内容問題に対処するように設計されており、これが他のモデルよりも優先される唯一の点だ。デイントンによる分析は次のように進む。（なお、デイントンは理論構築において気づき行為とその内容を別様に分析することを出発点としつつも、分析の結果としてそれらを同化させている点に注意されたい。）彼は、第一に、瞬間的な気づき行為を指定するモデルでは、同じ内容が繰り返し呈示されるという現象学的に不全な予測がもたらされてしまうとする。第二に、この繰り返し内容問題を回避するために、気づき行為を瞬間的なものとせず、持続的なものとし、隣接する気づき行為をオーバーラップさせ、オーバーラップ部分は数的に同一であるとする。このとき、気づき行為の持続幅は、内容の持続幅と一致させられる。そして第三に、こう考えると、気づき行為とその内容を二つのものとして分離させておく理由がなく、それらを同化させても何も失われないという。

だが彼の分析は、いずれの段階においても拙速に思われる。

第一に、繰り返し内容問題が、気づきとその内容の二分法にとって抜き差しならない問題を生じさせるのかについては疑問が残る。（デイントンのこの分析段階では、まだ気づき行為とその内容が区別されており、この区別を維持したまま我々が論じることはフェアである。）気づき行為とその内容（経験と経験内容）を区別し、現象学的に呈示されるものは内容である（現象学的に呈示されるものはどのようなものとして内容が呈示されるかである）と考えてみよう。（これこそが、気づきとその内容を区別する分析の眼目であり、それは非時間的な意識をめぐる議論文脈でしばしば表象説と呼ばれる<sup>(1)</sup>。）しかしこのように前提しても、気づきと内容の二分法は、繰り返し内容のような現象学に反する問題を生じさせることはない。例えばド-レ-ミのメロディを聞くと、仮に我々が、ド-レという通時的 content をもつ気づきと、レ-ミという通時的 content をもつ気づきの両者を、瞬間的なものとして例化したとする。だが、それらの通時的 content に含まれるものが、特定の時点に一度だけ鳴るものとしてのレなのであれば、我々にはその時点にレが一度鳴ったとしか思われない



だろうし、我々は「私はそのときにレを一度しか聞かなかった」と報告するだろう——たとえレを聞くという気づき行為が二度例化されていても。レは二度でなく一度だけ鳴るように思われるのは、瞬間的気づきに基づいたモデルからも予測される場所である。そしてこの予測が可能なのは、我々が気づきと内容を区別し、現象学的に呈示されるものが気づきではなくその内容であるとすることによって、内容の時間的特性（特定の時点に一度レが鳴るという内容）によって現象学的特性が尽くされていると考えることができるからだ。デイントンは、気づき行為と内容を区別し、気づき行為を瞬間的なものとする、現象学的に不全な予測が生み出されると考えるが、これは誤りである。デイントンの考えに反して、気づきと内容の二分法を前提しても、繰り返し内容問題はそれほど脅威ではないのである。



図(a) デイントンのモデル。(b) デイントンのモデルから PPC を差し引いたもの。A1 と A2 は時間的に隣接する二つの気づき行為、C<sub>1</sub> と C<sub>2</sub> はそれら二つの気づき行為の内容。デイントンのモデルでは A<sub>1</sub> の時間幅と C<sub>1</sub> の時間幅は一致するが (A<sub>2</sub> と C<sub>2</sub> についても同様)、PPC を差し引いたモデルでは A<sub>1</sub> の時間幅と C<sub>1</sub> の時間幅は一致しない (A<sub>2</sub> と C<sub>2</sub> についても同様)。

第二に、仮に繰り返し内容問題が深刻な問題であったとしても、デイントンのモデル構築において、その問題への対処から PPC へ移行することには疑問が残る。気づき行為を持続的なものとして、通時的に隣接する経験間でオーバーラップする気づき行為の部分が数的に同一とすること自体は、PPC を含意しないはずだ。PPC とは、内容が占める時間幅は、その内容の気づき行為が占める時間幅と正確に同じであるとする原理である。例えば、通

時的に隣接する二つの経験があり、それらは同じ時間幅  $T$  の内容  $C_1$  と  $C_2$  に気づいているとしよう。そして、その気づき行為を  $A_1$  と  $A_2$  と呼ぶ。ここで、 $A_1$  と  $A_2$  が時間的にオーバーラップしつつも、 $A_1$  の時間幅は  $T-(<T)$  であり、 $A_2$  の時間幅は  $T+(>T)$  であるとする余地がある。そのようなモデルでも、 $A_1$  と  $A_2$  のオーバーラップおよびその数的同一性さえ確保されていれば、繰り返し内容問題には同じ論点によって対処可能なはずである（上図参照）。それならば、なぜ PPC を採用しなければならないのだろうか。（念のため言うが、我々はこのモデルを主張したいのではなく、デイントンの分析の不十分さを指摘しようとしているだけである。）もしも PPC を独立に証拠立てることができなければ、次のステップ——気づきと内容の区分の崩壊——に進むことはできない。ここで現象学的もっともらしさに訴えて PPC を支持するのは、単なる論点先取にしか思われない。我々が指摘しているのは、我々が目下試しに描いて見せた PPC 抜きモデルでも、繰り返し内容問題を回避して現象学的に整合的な帰結を与えることが可能だということだからだ。デイントンは、PPC を支持するための独立な根拠を与えなければならなかった。

第三に、仮に PPC を受け入れるとしても、気づき行為と内容を単純には同化することはできない。デイントンは、PPC を踏まえた彼自身のモデルにおいては、気づき行為の時間幅と内容の時間幅が一致するために、気づき行為そのものと内容そのものを同一視しても何も失われたいとする。だが、これはあまりにも性急だ。我々は、内容に気づくのであって、気づきに気づくのではない。言い換えれば、我々は経験内容を経験するのであって、経験を体験するのではない。例えば、赤いリングを眼前におくとき、我々は赤いリングを見るのであって、赤いリングを見ることを見るのではない<sup>(2)</sup>。ただこの一点を理解すれば、デイントンによる気づきと内容の同化は容易には受け入れがたい。

だがこのような指摘は、彼の立場から見れば論点先取に見えるかもしれない。そこで我々は、気づきと内容の同化のゆえに、彼自身の理論的枠組みが内的不整合を抱えていることを指摘しよう。そして我々は、彼の見解に修正を加えていくと、もはや共意識を必要としないモデルが導かれることを示そう。出発点となるのは、彼が共時的統一と通時的統一に対する説明項として導入する共意識に関する主張だ。

## 6. 共意識は本当に必要か

彼によれば、共意識とは経験内容の間の原初的關係である。それは、「それ自体の内在的な現象的特性を欠きつつも、多様な現象的内容の間にある現象学的に実在的な接続をつくりだす関係」(p. 241)である。それはすなわち、赤いリングを見るとき感じや、ドの音を聞かときの感じとは異なり、経験の質として呈示されるようなものではないが、それで

も、経験を接続する実在的な関係である。彼は、共-意識の特徴とそれが果たす役割について、次のように述べる。

共-意識とは経験の关系的性質であって、経験そのものではない。そして、それは現象的関係であるので、それが経験されるがゆえにそれが現象的統一を説明すると考えるのは決しておかしいものではない。結局、我々の意識の全体的状態の特性が、その状態の要素部分が関係づけられる仕方によって顕著に影響されるというのは、明らかなことなのだ。(p. 247)

我々の見るところでは、共-意識という関係を現象的特性として導入したことの副作用が、この記述に圧縮されている。彼によれば、共-意識とは「経験そのものではない」。だがそうだとすると、共-意識は経験内容でもないはずだ（なぜなら、彼のモデルにおいては経験と経験内容は同化させられているからだ）。つまり、共-意識は経験されるようなものではない。にもかかわらず、彼は直後に、共-意識が「経験されるがゆえに、それが現象的統一を説明する」という。もはや、矛盾は明らかだと思われる。

もしも経験と経験内容を区別するならば、彼には次のような方策があったに違いない。共-意識は経験間の関係であり、経験内容間の関係ではない。（ちなみにこうすれば、共-意識は経験されるもの（経験内容）ではないので、それが経験されないからといって、その存在を否定されるいわれはない。）だがこうすると、デイントンにとって、少なくとも二つの問題が生じる。第一に、この場合、共-意識はもはや現象的特性ではまったくない。なぜなら、経験と経験内容の二分法に基づけば、現象的特性は経験内容であり、経験そのものや経験の特性は端的に現象的特性ではないからだ。もしかしたら、デイントンは、現象的特性に影響するもの（とりわけ共-意識）は、それ自体がある種の現象的特性だと考えているのかもしれない<sup>(3)</sup>。そうだとすると、それは完全に誤った推論だ。もしも、ある特性を、経験内容に影響するということでもって現象的特性であるとみなすならば、我々の物理的脳の媒体的性質の大部分が、さらには物理的身体や物理的環境がもつ多数の性質もまた現象的特性だと言わなければならない。第二に、気づき行為（経験）と内容（経験内容）を区分する限り、二つの経験を接続する关系的性質を指定する利点がほとんどなくなる。経験と内容の区分に立てば、現象的特性とは内容そのものであって、経験そのものや経験の特性ではない。時間意識において問題になっているのは、いかにして現象的特性が通時的に（しかも時間的順序を持って）統一されるのかということだ。経験と内容の二分法に基

づけば、現象的特性の通時的統一は、内容の通時的統一に他ならない。そうすると、内容ではなく経験に何らかの新奇な特性（とりわけ共-意識という関係的性質）を付け加えたところで、（それが内容に何らかの帰結をもたらさない限り）現象学的な重要性は何もない。

ならば、逆の方策はどうだろうか。すなわち、共-意識は経験間の関係ではなく、経験内容間の関係であるとすればどうか。この考えでは例えば、ある内容がもつ、時間的に隣接する他の内容に先行するという関係的性質こそが、共-意識である。だが、この考えは結局、次のような反論に直面する——内容そのものに加えて、なぜそのような内容間の関係が必要なのか。例えば、C1 という内容と C2 という内容が与えられ、それらが共-意識の関係にあると考える代わりに、C1 に続いて C2 という一つの内容があると考えれば、共-意識がなすべき仕事は共-意識なしで済まされる。つまり、時間的前後関係を、内容間の関係とみなさず、内容そのものとみなせばよい。我々は、二つの連続する内容に気づき、さらにその内容の間に時間的關係があるというわけではなく、我々は端的に時間的に連続した内容に気づいているのである。ボールが右から左に動く場面に我々が遭遇するとき、右にボールがあるという現象的内容と、左にボールがあるという現象的内容に加えて、何か二つの現象的内容を結ぶ性質（現象的だろうが非現象的だろうが）があるわけではない。我々は単に、ボールが右から左に動くという現象的内容に気づくのである<sup>(4)</sup>。そしてこれがおそらく、経験と内容の区分に基づいた分析——表象説——の眼目である<sup>(5)</sup>。そして、この分析のほうが、明らかに存在論的節約の点で優れている。

結局、我々の論点は次の通りだ。共-意識について整合的に語りたければ、経験とその内容の区分を維持しなければならない。だがそうすると、共-意識を必要としない、存在論的節約の点で優れた分析が帰結する。

もちろんデイントンはこれに対して、そもそもいかにして現象的内容が時間的に統一されるのかという問いを強調するだろう(pp. 251-5)。そして、それを説明するのが共-意識という関係的性質なのだと主張するだろう。だが彼には、表象説のリサーチプログラムに対する理解が不足しているように思われる。表象説は、意識や経験などと一般に呼ばれているものを、表象とその内容に分析し、いわゆる現象的特性を内容と同一視する。ここで、内容は意識経験の分析とは独立の理論で同定されると想定するのが普通である。そうすることによって、意識の現象的特性を還元的に説明することができると期待されるのだ。このプログラムのもとでは、いわゆる時間意識は、表象とその時間的内容に分析されるだろう。さらにその時間的内容は、独立に構築された内容一般の理論で同定される。現象的内容が時間的に統一されるのはいかにしてかという問題は、これら二つの分析ステップのうち後者により対処される。表象論者は、内容の時間的統一を、ある種の内容そのものとし

て内容一般の理論で同定するか、もしくはこの統一を、何かしら内容間の関係と呼べるもので説明する余地すらある。ただしその関係とは、他の性質に還元不可能な現象的な関係的性質（とりわけ共-意識）などではなく、実在する世界の側で成り立つ関係に基礎を持つと考えられるだろう。結局表象説のもとでは、共-意識という奇妙な現象的特性を導入する必然性は見当たらない。むしろ時間意識の説明のために共-意識のような原初的な関係的性質を導入するならば、それは時間意識の謎を、別の要素に移し替えることにしかならないだろう。

以上、我々は、意識の表象説に基づいて、デイントンのモデルを批判的に検討した。本論の依拠する表象説の中心にある考えは、経験されるものがそれ自体まとまった連続的なものであるということである。しかしそれは、個々の経験内容がまずあって、それらが連続してまとまった全体をなすということではない。この立場から見れば、経験内容はそもそも全体として経験されるのであるから、意識経験の統一は問題として生じようがないのである。これに対し、デイントンは、全体としての経験の構成要素それ自体も経験だと考える。この前提を受け入れる場合にのみ、「様々な意識経験はいかにして統一されるのか」という問題が生じ、この問題を解くための共-意識なる原初的な関係が導入される必要に迫られる。今や我々とデイントンの間の溝は明らかだ。我々の経験内容が連続してまとまった全体をなすという現象学的事実は、誰もが受け入れるべき議論の前提である。しかし、全体としての経験の構成要素それ自体が経験としての身分をもつのかどうか、これに関しては異論の余地がある<sup>(6)</sup>。これまで我々が展開した議論の要点は、デイントンとはまったく逆の前提に基づく理論が可能だということだが、経験についての単なる見解の相違を超えて、二つの立場がどれほど有望であるかのさらに踏み込んだ比較検討は今後の検討課題とする。

## 註

\* これらの著者はこの論文の執筆に等しく貢献している。

(1) 表象説の代表的な業績として、Harman(1990)、Dretske(1995)、Tye(1995)を見よ。

(2) もちろん、我々はときに経験を体験することがある。例えば、内観的注意を働かせることによって、私は私が考えていることを考えることができる。また例えば、鏡を使うことで、私は私が見ていることを見ることができる。しかしここでの我々の論点は、経験と経験内容は一般に同一視することができないということだ。

(3) デイントンは実際、記憶に基づいた時間意識の説明を批判する際に、この原理に頼っているように見える。彼の描く記憶説の一つのバージョンでは、我々がドレミのメロディを聞くということの説明が次のように試みられる——人はレを聞く時に、ドを聞いた記憶を有し、なおかつドは今起こったところだという信念がその記憶に伴う。これに対して彼は、そのような信念が役割を果たすためには、それは意識的な信念でなければならない、だがしかしそのような複雑な意識的信念が例化されているように思われないとして、記憶説を却下する(p. 125)。ここで彼は、無意識的な信念は現象学的な時間性に貢献しないと想定して

いる。すなわち、何かが現象学的なものに影響するためには、それ自体が現象学的でなければならないと、どうやら彼は想定しているのだ。

(4) 事実、経験科学の知見から、時間的内容の表象の存在が示唆される。我々の脳は多数の準独立的に機能する一群の神経表象媒体から構成されており、それには視覚的な運動を表象することに特化した媒体 (V5/MT) が含まれ、さらにこれの活動が意識的な運動視に必要な役割を果たしていることが示唆されている (Pascual-Leone & Walsh, 2001)。

(5) この方針に沿った数少ない分析の一つとして、Tye(2003, ch. 4) がある。

(6) 全体としての経験内容しか我々には与えられていないという本論の立場は明らかに、意識経験についての一元論にコミットする。しかし、経験内容についてのこの一元論は、五つの感覚器官に特有の様々な経験的側面があることを否定しない。我々が主張するのはただ、視覚や聴覚を通じて経験された内容はそれ自体として切り離されてしまえば、全体として経験された内容と同じ身分をもたないということだ。

## 文献

Dretske, F. (1995): *Naturalizing the Mind*. Cambridge, MA: MIT Press / Bradford Books. (2007, 鈴木貴之訳, 『心を自然化する』, 勁草書房).

Harman, G. (1990). 'The intrinsic quality of experience,' in J. Tomberlin (Eds.), *Philosophical Perspectives, 4: Action Theory and Philosophy of Mind Philosophical Perspectives* (pp.31-52). Ridgeview Publishing.

Pascual-Leone, A. and Walsh, V. (2001). 'Fast backprojections from the motion to the primary visual area necessary for visual awareness,' *Science*, 292. pp. 510-2.

Tye, M. (1995). *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: The MIT Press.

———. (2003). *Consciousness and Persons: Unity and Identity*. Cambridge, MA: The MIT Press.

〔太田紘史 京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員〕

〔佐金武 京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員〕